

狩野千秋著「マヤとアステカ」

近藤出版社 東京 426 + 19 pp. 1983年

商品の内容とその宣伝コピーに対応関係は不要であるという原則は、出版業界においても確立しつつある。本書もその点においては時流をはずれていない。新しい発掘調査、欧米の研究成果の摂取、多年の現地踏査、広角的視点をもつ総合的研究とうたわれた本書の内容を検討してみよう。

本書の「マヤとアステカ」というタイトルにもかかわらず、両文明の文化や社会の相互比較が皆無であることにまず肩すかしをうける。どうやら、本書はマヤの概説書とアステカの概説書の合本という意味で総合的研究とされているようである。しかし、両文明の概説書として、われわれは中公新書、クセジュ文庫、講談社現代新書などを利用することができるし、マイケル・コーの2部作「マヤ」「メキシコ」とか増田義郎氏の「太陽と月の神殿」「インディオ文明の興亡」などによりメソアメリカ文明の基礎的な情報をえることもできる。既存の概説書では紹介されていない新しい情報とか、よりわかりやすいマヤ像やアステカ像を、本書はわれわれに提供してくれるのだろうか。

アステカ文明の部の章構成は、著者の訳されたスーステルの「アステカ文明」（クセジュ文庫、1971）のものと酷似している。本書の3章「首都」、6章「法律と裁判」、10章「アステカ人の生涯」などはスーステルのものにはみられない章であるが、その記述の大部分は、Warwick Bray, *Everyday Life of the Aztecs* (Batsford&Putnam, 1968) の翻案としか考えられない。とくに6章はBrayの書の83-87頁のそのままの翻訳といってよい。Brayの著作からの部分的翻訳は、本書の各所にちりばめられており、それゆえ読者は文脈のつかめぬ唐突な記述にでくわす。338頁に紹介されている表音文字については、日本語を例にして説明もできるのに、Brayのした英語の例をそのまま紹介するなど、著者自身の創意工夫がほどこされてもいない。おまけにBrayの誤った記述がそのまま紹介されている例もみられる（338-39頁の地名絵文字の事例など）。

新しい情報についてはどうであろうか。あとがきでも言及されている1978年－1981年の「大神殿発掘調査」の成果が本書にひとつも紹介されていないことが雄弁に物語るように、新情報を期待するのは無理のようである。本書の脱稿時と推定される1982年なら、「アステカに関する今世紀最大の発見」とまで喧伝されたコヨルシャウキ円盤の発掘以降の調査の成果は十分利用しえたはずである。INAHの報告書はもとより、米国の大衆グラフィック誌である*National Geographic*（1981年12月号）などからでも十分情報をえることができる。なお、この成果の一部については評者の『魅えるアステカの大神殿』（「世界旅行－民族の暮らし、5:創る・祀る」、日本交通公社、1982）を参照していただければ幸甚である。この成果を利用すれば、259頁にあるマルキーナの時代遅れの平面図や首都の様子の記事を大幅に修正できたであろう。

本書の図版の大部分が1960年代の著作から選ばれていることが示唆するように、1970年代のアステカ研究の諸成果は、本書にほとんど盛り込まれていない。ペドロ・カラスコらによる社会成層(*estratificación social*)、経済・政治・イデオロギーに関する諸研究や、石彫や絵文書などの*iconographic*な分析研究の成果はまったく紹介されず、それらの研究で批判されている1960年代までの定説が無批判に繰り返されている例が多い。本年報3号（1983年）で八杉佳穂氏が批判された「マヤ太陽年＝365.2420日」説がそのまま紹介されている（138頁）のは、その好例である。

本書は冒頭にかかげた特徴のほとんどを欠落させている。そして校正ミス、誤記、不適切な表現の多さも、本書の特色のひとつであるといつてよい。単純な校正ミスや誤記はさておき、トゥッシュテペック＝トチテペックとかトラカエル＝トラカエレルツィンなどのように同一地名や人物が異なった表記をされたり、アステカと対峙していたタラスカ(*tarasca*)がトラスカン(*tlaxcan*)と誤記されたり、著名なアステカ研究者Francisco de Paso y Troncosoがパソとトロソソの2人とされたり（348頁）しているのに遭遇すると、こうした誤りがたんなる不注意によるものとは考えにくくなる。

訳語の不適切さも目立つ。パプア島にしかない極楽鳥がケツアル鳥の訳語としてあてられているのはまだしも、カカオ豆がココ豆となり（283頁）、さらにはアンデスのココと同一視されたり（281頁）、チチメカが「狩獵遊牧民」

(nomadic hunters の訳語か、272 頁)とされているのには当惑せざるをえない。ナワトル語を「明解な言葉」(240 - 41 頁, lingua franca の訳語か)として、「発音しやすく、快適な響きをもち、語彙豊かで調和もとれ、…云々」というスーステルの言を引用して説明しているのには、言語学者ならずとも開いた口がふさがらない。本書には、民族集団や人物の特性を示すのに極めてエスノセントリックで独断的な言葉が頻出するのも気掛りである。

本書における誤った記述のなかには、地図とか既存の概説書を参照すれば容易にさけうるものも多い。「北はミシュテカ…、南はシウコアックから…」(252 頁)という記述は、地名を逆にしなければならない。ティソクの石に刻まれた 15 の地名のひとつアウィリサパン(現ベラクルス州オリサパ)がテスココ湖の近くの湖となっている(380 頁)。またテノチティトランの 4 大地区の方位に関しては、タネ本であるスーステルの本の誤りをそのまま踏襲している(258 頁)だけでなく、4 大区域制がインカ帝国の首都クスコにもあったとのべる誤りまで付加している(268 頁)。とりわけ理解しがたいのは、コルテスとマリンチェのあいだにできたマルティン・コルテスが、20 世紀初頭のメキシコ革命で活躍したという記述(411 頁)である。

この種の誤りを指摘すると紙面もつぎるので、本書でも繰り返されているアステカに関するいくつかの常識・定説の誤りを修正しておこう。

①アステカのピラミッドは 52 年を周期とする新火祭ごとに増築された(362 頁 - 63 頁)。テノチティトランの大神殿は 7 期にわたって増築されたことがわかっている。とすれば最後の新火祭 1507 年 - $52 \times 6 = 1195$ 年がテノチティトラン創設年となり、定説の 1325 年と大幅に異なってくる。増改築に歴代の諸王が着手していたことはドゥランの年代記、メシカ年代記も明記している。

②アステカ王国は 489 の従属都市をかかえ、それらは 38 の地方都市国家にわけられていた(253 頁)。これは、メンドサ絵文書 2 部の貢納記録の誤った解釈にもとずいている。489 の従属都市とはメシカの収税官カルピシュキが配備されていた町でしかなく、テスココ、トラコパンの領主も独自に収税官を様々な町に配備していた。この資料に依拠した Robert Barlow によるアステカ王国の版図や領域区分をそのまま利用することはさげねばなるまい。この点については、史林 58 - 2 (1975)、62 - 5 (1979) に発表した拙稿を参照されたい。

③トゥラン、すなわち現イダルゴ州トゥーラを首都とする「トルテカ王国」は12世紀末に崩壊した(244-45頁)。「蘭草の繁茂する所」すなわち「文明都市」を意味するトゥランは、ナワ語を使用する「チチメカ系」の人々が中央高原に侵入した際に見出した城砦都市群の総称でしかない。ショロトル絵文書では、メキシコ盆地北東部にも2つのトゥランが描かれているし、 Cholula, Teotihuacan, Teotihuacanなども年代記ではトゥランとされている。こうしたトゥラン群を「セ・アカトル・トピルチン・ケツアルコアトル」王が統治する単一のトゥーラに還元し、トルテカ王国という虚構をつくりあげたヒメネス・モレーノの資料操作そのものに疑点がある。この点については大井邦明氏の「テオテナンゴーもうひとつのトゥーラー」『角田文衛博士古稀記念論集』, 1983)を参照されたい。

④アステカの「暦の石」の中央部にある舌を出した像はトナティウ=太陽神の顔である(376頁)。「暦の石」あるいは「太陽の石」に関する解釈は、1920年代にドイツ人Hermann Beyerが提唱したものが定説とされてきた。しかし、舌を出した像はトラルテクトリとよばれる大地神の特徴であることはボルジア絵文書やクアウシカリという石盤のモチーフからも明らかである。オリンという地震を示すモチーフの中央に大地神と地震を示唆する震動する舌が描かれているほうが整合的である。この点についてはCarlos Navarrete y Doris Heyden “La cara central de la Piedra del Sol :una hipótesis” *Estudios de Cultura Náhuatl*, 11 (1974)を参照されたい。

以上のほか、テノチティランをチナンパ都市とする説(これに対しては、Edward Calnekの一連の批判的研究を参照)とか、絵文書=マゲイ紙とする説明(343頁)なども修正する必要がある。

本書の限界は、研究の基礎となる考古学・民族史的資料を自己の眼と頭で分析する作業を怠ったことに起因している。復刻・公刊されているアステカの民族史的資料の大部分は十分に分析・解釈されないまま、多くの情報をひそめている。これにアプローチすることで、従来の平板なアステカ像からは窺えなかった多様な異質性を解明することが、現在の研究課題である。

著者もはじめの構想どおり、都市、建築、彫刻の様式・技術の記述を踏まえ独自の解釈を提示することに専念されたほうがよかったのではなかろうか。石

彫の分析からでも文化・社会・経済という側面に十分アプローチできることは Francis Robicsek や Richard Fraser Townsend らの近年の研究が雄弁に物語っている。
(神戸市外国語大学 小林致広)



「マヤ文明」の概説は、近年、挑戦的だが困難な仕事になりつつある。それは、マヤ文明の中心地についての理解が深まり、周辺地域の発掘も進展するにつれて、従来のようにマヤを古典的文化（紀元 600 年～ 900 年）を頂点とする統一的な文化領域と把握するよりも、各時代に特色のある、開かれた地域文化の集合体・連続体としてマヤ文化史をとらえる相対的な視点が、研究者のあいだに見られるようになってきたからである。仮説構築とその実証を中心とする調査計画の増加や発掘方法の精密化にともない、一線的な発展と衰退という、これまでの“Rise and Fall”モデルにはなじまない、失敗と成功の実験のプロセスの各地での生起、外部からの文化的影響とその受容の地域差の実態などが明らかになりつつある。たとえば、1946年に初版の出た Sylvanus G. Morley のマヤ文明概説書 *The Ancient Maya* は、昨年 Robert J. Sharer の改訂で第4版が公刊されたが、特に、編年・生業・後古典期マヤ高地社会・交易と外部世界との接触などの章には、全面的な加筆・訂正がほどこされている。これらに関する新データは、一昨年出版された Norman Hammond の *Ancient Maya Civilization* でも、Morley の旧版や J. Eric S. Thompson の *The Rise and Fall of Maya Civilization* (1957) などにくらべ、大きな比重をもつようになってきている。また、マヤ以外のメソアメリカ文化に通暁することがマヤ学者としてすぐれた業績をあげる条件であることは、Eva Hunt, Ulrich Köhler, Carlos Navarrete などの最近の仕事を見ても明らかである。

しかし、本書の著者は、あくまでも「マヤ」を内部的に一体的な文化領域としてとらえ、古典期マヤ文化の解説を中心にすえる。たとえば、本書の題名（そして現実）とはうらはらに、マヤ地方とアステカ国家の相互関係が論議されることはない。このような著者の基本姿勢は、次の一節に集約されている。「マヤ族は極めて保守的な種族で、伝統的な文化を維持し、特定の居住地に執着する

傾向が強」い(27頁)。現代のマヤ語族についてのこの認識の当否はさておき、著者は、この命題にもとづく次の2前提から出発する。(1)マヤ地方は、ユカタン半島・ペテン低地・南部高地などに区分できるが、文化的には一括しうる領域を形成していた。したがって、マヤ地方の中ならば、異なる地域からのデータであっても、取捨選択により、文化モデルの作成に用いることができる。(2)マヤの文化は時間的变化に耐えて存続する。したがって、後古典期の絵文書、スペイン人による征服直後の記録、現代の民族誌などを援用すれば、古典期のマヤ文明を理解できる。マヤ文化の空間性と時間性をめぐるこれら2つの前提にたち、著者は「マヤ族」(そういう実体があったのだろうか?)に関する様々なデータ(ただし、民族誌の利用は見られない)を集積して、その概容の解説につとめる。

しかし、最近の研究は、前述したように、マヤ地方の地域的・時代的な文化的相違、外来文化の意味などに注目している。言いかえれば、大遺跡や石碑を残した古典期の文化中心地のみを語るという学問関心上のかたよりを排し、時間軸上と空間軸上にあらわれたマヤ地方の地域文化のメッシュ・マップを作成して、部分間の関連をモデル化し検証するプログラムづくりが、現在の「マヤ文化概説」の中心的作業になっている。著者が異なる立場をとるのは、それとしていいと思う。ただ問題なのは、新しい知見も多少加味されているとはいえ、本書が提示するデータが、基本的に今から20年前のマヤ学の水準を超えていないという点であろう。

読者としてつらいのは、本書には事実の羅列が多く、それが必ずしも親切に記述されていないことである。そのために、マヤ文化やマヤ学の全体像が把握しにくい。たとえば、「マヤ文明の発展段階」の項(34～77頁)には、形成期(または先古典期)後期(300 B.C.～300 A.D.)。原古典期(300～400 A.D.)。古典期前期(300～600 A.D.)。古典期後期(600～900 A.D.)とあるが、巻末の年表では、先古典期(～0 A.D.)。古典期前期(0～400 A.D.)。古典期中期(400～700 A.D.)。古典期後期(700～900 A.D.)となっており、一致していない。また、「ティカルの5D-33号くらの大きさの建物なら、百人の人間が一つのテラスをつくるのに、約一ヶ月あれば充分」(164頁)という記述には、この建造物の写真も規模のデータも添えられていないので、読者には

「充分」さが評価できない。チチェン・イツァ遺跡のカラコルという建築物の天文台としての機能を説明するのに、アステカの絵文書に描かれた観測図を引用する(71頁)のならば、ユカタン半島とメキシコ中央高原、古典期後期と後古典期という空間的・時間的距離を考慮に入れた、それなりの理由づけがほしい。また、「呪術用の幻覚剤となるキノコを磨りすぶすため」(91～92頁)などに石臼が用いられたらしいとあるが、マヤ地方で「幻覚キノコ」が用いられた証拠は、評者の知るかぎりまだないので、著者にはこの推測を裏づけるデータを示してほしい。頻出する誤字・脱字のほかにも、ソケー族(26, 40頁)とソケ族(31頁)、ストゥウィル族(29頁)とツトゥヒル族(30頁)、トニナ遺跡(209頁)とトニーナ遺跡(221頁)、「トニナー」が原音に近いなど、表記の統一が望まれる場合も散見される。ツォティル語(26, 28, 30頁)は「ツォツィル語」の方が原綴(Tzotzil)の発音に近いであろう。マヤ地域の言語分布図(26頁)にあらわれるチコムセルテカ語は、すでに消滅している。

著者が本書では触れずに終った最近のマヤ学の成果には、次のようなものが含まれる。

(1) 集落の形成について。Hammondによるベリセの発掘は、漁撈にもとづく集落形成のみならず、神殿を中心とした大集落の誕生を示している。つまり、定住農耕による人口の集中が宗教を中心とした都市を生み出すというこれまでのモデルとは別の発展形態が、ベリセ地方では重要な意味を持っていた。またDavid Friedlは、増築を繰り返して大神殿を築くという従来知られていた建築術とは異なり、一気に大規模な神殿が建設された原古典期の例を発掘しており、そのような突然の発展がベリセに生じた点に注目している。

(2) 都市間の関係について。石碑に刻まれた都市の紋章の分析にもとづき、Joyce Marcusは、マヤ地方の都市群のあいだには、方位モデルに結びついたランクづけがあり、経済地理学のCentral Place Theoryに合致するような、支配従属のネットワークが都市間に存在していたと仮説的にのべている。都市のあいだの具体的な関係の可能性としては、通婚・巡礼・定期市・役職者の赴任制度などが、これまで議論されている。また、Friedlは、ベリセ地方とメキシコ湾岸低地のあいだは、オンド川・ベリセ川・サン＝ペドロ川・ウスマシタ川などの水系を利用すれば、陸地を数十キロメートル歩行するだけで連絡が

でき、その陸路の部分にちょうどティカルの大遺跡が位置していることから、ティカルの通商基地としての成立を重視している。

(3) 多彩色土器について。ペテン低地古典期前期のツァコル式土器が有名だが、最近、米国ブリガム・ヤング大学新大陸考古学研究所により、メキシコ南部チアパス州のサン＝グレゴリオ川源流地帯のラガルテロ遺跡で、大量の多彩色土器片が発掘された。その多くが人為的に破壊された跡を示していることから、この地方の現代の民族誌にあらわれる、儀礼的な土器破壊との関連も指摘されている。

このようなマヤ学の進展の現状への目配りを欠いていることにも見られるように、本書の不備は、1983年に刊行されたにしては、最新の成果を摂取していないという一点に尽きる。Gordon Willey と Jeremy A. Sabloff は、1974年に新大陸考古学研究史を出版し、これまでの学史を、推測の時代(1492～1840)、分類と記述の時代(1840～1914)、編年と機能の時代(1914～1960)、解釈の時代(1960～)に分けた。そして、先年その第2版を上梓したときには、1970年代以降を新たな進歩の時期として独立させなければならなかったほど、学問の進展は速い。残念ながら、著者は、1970年代以前の研究書を中心にして本書を書いてしまった。マヤ学の進捗は、わが国でも著しく、言語学の八杉佳穂氏(国立民族学博物館)の研究に目を通せば、暦法に関するマヤ文字(128～129頁)のうち、シミ・シブ・セーなどは、それぞれキミ・キップ・ケフと読まれるべきこと、ユカタン半島の地名アカンセ(55, 56, 200, 217頁)はアカンケと発音しなければならないこと、あるいは、先スペイン期のマヤ人が1年を365.2420日と正確に計算していたという説(138頁)は、1930年にこれを唱えたJohn E. Teepleのひとり合点だったことなどが納得できたはずである。

なお、巻末に索引と発行年順の参考文献表が載っているのは便利だが、そこにも誤記や不統一が少なくないのは惜しまれる。

(中部大学 落合一泰)

第4回定期大会（1983年度）シンポジウム報告要旨

ブラジル地方中都市の人類学的研究
—— ツーリスト的調査の風潮を排す ——

前山 隆（筑波大学）

文化人類学は、第一次世界大戦前後からそれまでの「安楽椅子の人類学」から脱皮して、現地に長期間住み込んで現地人と生活を共にし、現地の言葉によって直接データを自ら創り出す集中的調査法を採用することによって発展してきた。日本人研究者は、日本の高度成長後1970年代から大量に海外へ調査研究に出て行くようになったが、人類学的調査法の展開とは逆に、ますますツーリスト的研究法を強化しているように見える。すなわち、短期間に広く各国の主要都市を駆けめぐり、現地の常民との生活の場における接触をもたずに研究・教育機関や政府の関係組織を訪問して二次資料を蒐集して帰国するというやり方である。これは、かつての安楽椅子の人類学と多くの共通項をもっている。コンピューターによる統計的処理法の発達がこの風潮を助長し、「人間不在の研究」が幅をきかせている。

私は1970年以降主としてブラジル地方中都市の人類学的研究をやってきた。今おおくの人類学者たちは部族社会・無国家社会の研究を抜け出して国家社会、産業社会、都市の研究をやっている。部族社会研究の社会人類学における「アフリカ・モデル」、すなわち集団分析中心の構造機能分析の欠陥を補い、その超克を目指して、その方法的手がかりを都市研究に求めている。また一方では、都市社会学における「シカゴ・モデル」を、部族社会研究で築いた人類学的調査法を都市、特に非西洋都市の研究にもち込むことによって修正し、それを超克しようとしている。人類学が都市研究においてユニークな貢献ができるのであれば、それは主としてその集中的調査法をとおして、平均的常民の日常生活に関するファースト・ハンドの資料づくりを行ない、エミック・アプローチにより人間不在の研究から脱皮することによってであろう。生活者自身がどのような意味を与えて生きているかの理解、つまり象徴体系とそれを具体的に操作し、

活用して生きる人間の把握は、長期的住み込み調査によってのみ可能であり、調査者が現地である種の「生活者」となることによって可能となるのであり、自然科学的実験者がモルモットを観察する態度によってではない。

ブラジルは主として Plantation America に属し、その社会構造、都市、価値体系、行動様式は初めプランテーション・システムと奴隷制をめぐって展開し、それが近代化・産業化の中で様々な変貌を遂げてきた。私はブラジルの中から、旧コーヒー地帯で、多くの近代移民を吸収し、工業化を果したサンパウロと旧サトウ地帯で、外国移民がほとんど入らず、工業化のあまり進展しなかったペルナンブーコを調査地に選び、それぞれの地域からひとつずつ地方中都市を選択して調査を進めてきた。

地方中都市における人口移動、社会的ネットワーク、都市への適応と社会上昇ストラテジーの研究、ことに個々の具体的事例に密着したライフ・ヒストリーに基づいた調査は、従来の大都市偏重の研究とは異なった視座をもたらすことができると期待している。長期住み込みによるフィールドワークに基づく地方中都市の研究はほとんどなされていない。

皮肉なことに、地方中小都市研究を軽視する風潮は、ひとつには社会科学の従属理論に負うところが大きいと考えられる。地方の在り方は中央に規定され、発展途上国の社会構造は world system によって条件づけられるのは間違いないが、このような図式と理論が、「従属」を強いられ、人間性をもっとも危機にさらされている抑圧されたセクターとしての地方中小都市に関する調査研究を軽視する方向へ研究者を追いたてている、ということは指摘できるだろう。

私は、1971～1973年にサンパウロ州のサンカルロス市で、1981～1982年にペルナンブーコ州のゴイアナ市で、長期的住み込みによる調査を行なった。私の採用したのは、従来の参与観察法ではない。調査者が現地調査の地域社会に「生活者」として、「活動的の参加者」として、quasi-member として参画しながらフィールドワークを行なうという方法である。サンカルロス市では、調査者が集団と人の行動を単に「観察」するのではなく、「集団を創り、自らその一員として役割をもってその集団を動かしていく」中で人々の思考と行動を了解していくということを、bilingual の三幕ものの創作劇を書き、演劇グループを構成するという形で行なった。ペルナンブーコ州のゴイアナ市では、10

才、8才、6才の日本語しか話せない子供を連れ、家族連れで現地に8カ月生活するという形で、家族ぐるみで「生活する」「生き抜く」ことをとおして調査を行なった。現地調査者が、妻子を本国に置いて単独で調査地へ入っていくこと自体、「非人間化」のプロセスでもある。現地の人間は、家族をもたない単独の外来者をその地域のノーマルな「生活者」とは見ない。現象学的人類学の立場からいうならば、人間の研究は、「人間について、人間として」行なう以外に方法はない。私は、異文化に属する人々に関するツーリスト的調査は排されるべきであると考える。

リマ市のバリアーダから

大 平 健 (聖路加国際病院)

ペルーの首都リマを取り巻く貧民街 (los Pueblos Jovenes) のひとつ Independencia 区での見聞を報告した。

精神科医として気がつくのは、住民の性格特性である。精神科の術語でいう精神病質人格 (psychopathische Persönlichkeit) ないし反社会的性格 (antisocial personality) の者が多い。この性格は未熟さと過剰男性性が極端に対をなす構造をもち、具体的には、粗暴で妻子にすぐ暴力をふるい、家庭外でも容易にケンカをし、強姦・窃盗・傷害・麻薬密売などの前歴があり、権威主義的で上の者にはへつらい下の者にいばり、嘘つきで、自分よりはるかに若い女と結婚するなどの特徴をもつ。

貧民街では、これら反社会的性格者はマチスタとみなされ、性格異常者とは思われていない。しかし、地区の貧困の構造——男達が中流下層程度の生活をし、家族が極貧状態にあえぐこと——は、この男達の性格と切り離して論ずることが出来ない。また、政治の側からの貧民街に対する Paternalismo を基調とする接近が、地区住民から受け入れられ易かったことも、この反社会的性格の構造に由来すると考えられる。

日本でも関白亭主と良妻賢母が対をなす如く、ペルーの貧民街の女達も、マチスタと丁度対をなす独特の性格構造をもつ。それは、ヒステロイド（類ヒステリー性格 Hysteroid）と呼ばれるもので、未熟さと過剰母性が組み合わされた一種の異常人格である。具体的な特徴としては、性的挑発・性的接触を避けること、目立たぬ地味な服装をし、自己顕示には無縁で、生活のスタイルが過度につつましくマゾヒスティックである。

特徴を羅列するだけでも、ヒステロイドがマチスタとびったり符号する組み合わせを作ることが分るが、事実この組み合わせの夫婦が圧倒的に多い。ヒステロイド達は子を得ると、夫の自分達に対するしうちとあいまって、自らの性格構造から、夫を疎外し、子との双数的関係（二人でひとつという関係）を作りあげる。彼女達は、また、自らを処女懐胎の聖母マリアになぞらえることも多い。彼女達の性格構造が、聖母信仰の盛んな文化的背景とみごとに溶けあうのである。彼女達が地区の貧困の構造の中で損な役廻りを演じることも、彼女達の性格には受け入れ易いことである。

以上が報告の中心点である。その他、Discussionの中で、精神科医の立場から、人間関係が樹立されるというのは必ずしも"良いこと"ではない旨発言した。殆んど理解されなかった印象を持ったが、人と人との関係には、むしろ、矛盾に満ちた両価的な関係の方が種類が多く、殊に上記のような性格構造をもつ住民（これは珍しくない）との接触は注意を要する。老婆心ながら、地域共同体の中で"人間関係を樹立"して調査に臨む覚悟の研究者は、せめて、「交流分析」程度の準備をして頂き度いと思う。

メキシコ市の発展と都市環境

山 田 陸 男 (筑波大学)

メキシコ市は、環状の山脈によって囲まれた、メキシコ盆地というほぼ独立した地理的環境の中に位置していることと、アステカ期以来今日まで、メキシコ中央部の政治中心地であり続けてきたということの2点において、特殊性をもっている。すなわち、都市環境を研究する立場から見れば、都市化が環境に及ぼす影響を比較的狭い範囲の自然条件との関連において分析すれば良い、という点で有利な事例である。また、歴史的に研究する場合には、同市が早くから一貫して重要な集落であった、ということは、利用できる資料が通時的連続性をもっている可能性が大きい、ということの意味しよう。

しかし、他方では、メキシコ市もまた、第二次大戦後急速な都市化率を示してきたことや近年都市人口の中に不良住宅に居住する住民の比率が著しくなってきたことなど、その他のラテン・アメリカの首都ないし主要都市とも共通する特質を持ち始めていることも事実である。したがって、メキシコ市の事例を研究することは、広くラテン・アメリカ一般の都市を理解するためにも必要であり、有効な方法である、と思う。

メキシコ市と全国の他地方や周辺農村との関係も、この主題を追求するうえで、見逃してはならない問題である。このことは、同市の都市機能の変遷として、考察することができよう。私は、現在のところ、同市の都市機能を基準とした発展段階を次のように考えている。1) アステカ期 (1325~1521年) : 帝国の政治、軍事、宗教の中心地、2) 植民地期 (1521~1810年) : 植民地の政治、軍事、宗教の中心地としての性格に加えて、外部との連絡網内の結節点、3) 19世紀の停滞期 (1810~1877年) : 全国中心地としての首都の機能低下、4) ポルフィリアートの発展期 (1877~1911年) : 首都が全国の主要都市と鉄道により連絡され、同市の商業機能向上、初期工業の中心地、そして、5) 革命後今日までの現代 (1911年以後) : i) 1910~1930年 : 農村からの難民受入

れ地, ii) 1930~1960年: 輸入代替工業化の根拠地, iii) 1960年以後: 第3次産業の中心地。

メキシコ市がメキシコ盆地の自然環境に与える影響は、歴史的にほぼ一貫して増大と地理的範囲の拡大の過程をたどってきた。元来平衡回復の能力を持つ「エコシステム」の特性を持っていたメキシコ盆地の自然環境は、テノチティトランの発展、征服後のメキシコ市の建設にともなう森林の伐採、スペイン式農牧業の普及（盆地面積の約75%）、19世紀中葉以来の資本主義的分業による急速なスプロール現象、第二次大戦後の人口集中による農地、森林の宅地転換、水需要の増加に対応する地下水のくみあげ、強制排水による地盤沈下、排水により汚染される流域の拡大、大気汚染の進行と拡大などによって、人為的に好条件を維持すべき「都市環境」としての特性を持つ地域によって、加速度的に置換えられてきた。

メキシコ市は、1970年連邦区と同一のものと見なされるようになり、また、実際の見地からも、連続した都市化域としての大メキシコ市という概念が必要になってきた。この地域内の都市問題は、ある問題の解決が別の問題を生むという形で、時とともに益々複雑な様相を呈してきた。今日においても、給水と排水、土壌と植生の破壊、化学的大気汚染と砂塵、不良住宅地域の拡大と公衆衛生指標の部分的悪化など、未解決の問題が多く存続し、しかも、その規模が大きくなっているものが少くない。

参考文献: 1) Yamada, Mutsuo. "Mexico City: Development and Urban Problems ...," (2 separate articles) Latin American Studies (Special Research Project on Latin America, University of Tsukuba), No.7 (1983), pp. 1-47, 49-75.